

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

| | | | |
|------|--|-------------------------------|---|
| 課題番号 | 17H06107 | 研究期間 | 平成29(2017)年度 ～令和3(2021)年度 |
| 研究課題 | 評価の刷新－学習科学による授業 モニタリングシステムの開発と社 会実装－ | 研究代表者 (所属・職) (令和4年3月現在) | 白水 始 (国立教育政策研究所・初等中 等教育研究部・総括研究官) |

【令和2(2020)年度 研究進捗評価結果】

| 評価 | 評価基準 |
|-----|---|
| A+ | 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる |
| ○ A | 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる |
| A- | 当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である |
| B | 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である |
| C | 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である |

(意見等)

本研究は、授業モニタリングシステムを開発し社会実装することで、「目標到達型のゴールと総括的評価による序列化」から「目標創出型のゴールと形成的評価による教育改善」へと評価観の刷新を図ることを目指す研究である。

5つの班編成により、システム開発、センター試験問題等を用いた認知実験、小中高校との連携や現場での実践が進んでいる。うち、認知実験によるテスト検証からは、問題内容や設問構成、形式の組み合わせにより思考過程等に違いがあることが明らかになるなど、重要な知見が引き出されている。また、システム開発では、音声認識率の低さ等の問題が判明し一部計画の変更がみられるが、問題点を詳細に検討し解決方法が具体的に模索されている点は評価できる。

【令和4(2022)年度 検証結果】

| | |
|------|--|
| 検証結果 | 当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった。 |
| A- | 具体的な研究成果として、授業モニタリングシステムとして対話分析支援システムを含む学瞰(学びの俯瞰)システムの開発を行ったこと、学譜(学びの譜面)システムを作成し、各学校の教員が知識構成型ジグソー法の授業案・教材・振り返りシートを共有し、メーリングリストを通して対話が可能な協調学習のコミュニティを構築したということが挙げられる。 |
| | 対話分析支援システムに関しては複数の特許を取得し、新型コロナウイルス感染症流行時においては遠隔による授業研究も実施している。加えて、大学入試センター試験、東京大学入試を用いた解答中の思考過程に関する研究の成果も興味深い。 |
| | しかし、当初計画にある、「テストのための教育」から「教育のための評価」への評価観の刷新がどのように行われたかについての説明がまだ不十分である。また、構築された各システムにより可能となった授業研究のコミュニティが、各学校における授業改善や生徒の学習に与えた寄与に関しても、十分には分析されていない。 |
| | 今後、学習コミュニティの拡大や追跡調査データの蓄積により上記の部分が明らかになることが望まれる。 |